

猛暑が続く松波町内で、いま最も元気のいいのがツマグロヒョウモンというオレンジ色が鮮やかなチョウで、暑さが和らいだ秋にコスモスの花を訪れる光景は、特に♀の場合格好のカメラターゲットとなるととても美しいチョウである。いずれも地色にその名前の由来となった豹柄模様が並び、写真からわかるように雌雄別種だと見間違っても不思議ではない。前翅裏面にはきれいな赤桃色がみられ、右画像は♂が筆者の指先にとまってくれている様子だが通常こんなに簡単には指に止まってくれることはなく、人の気配にはきわめて敏感で飛翔スピードも速い精悍なタテハチョウである。このときはたまたま野外で自然羽化したばかりの♂に出会って指先にも止まってくれた。♀の模様は、体内に毒をもつせいで鳥などの攻撃から身をまもっている毒チョウ（例：カバマダラ；沖縄・八重山諸島に普通）の仲間とそっくりで、自然界で生き抜くために毒チョウに擬態しているという説があるのだが、筆者は、たまたま同じ模様であるために生き延びた「自然淘汰説」がふさわしいと考えている。



80701 西畑



Oct.6,2005 松波町

幼虫がスマレ類の葉を食べて育つ種で、例えば高砂市松波町のSさん宅の前庭のスマレから毎夏きれいなチョウとなって飛び立っている。もともと南方系のチョウで、地球温暖化の影響もあって分布を北方へと広げており、多くの家庭や公共花壇に植栽されるパンジーも幼虫が好むいいエサとなるため、どんどん増えているチョウである。2006年7月、いわゆるゲリラ豪雨が西畑地区を襲ったとき、テニスコート周りに自生しているノジスマレを食エサとしていた本種の幼虫が、そのスマレ群がすっかり水没したせいで行き場を失ってテニスコート周辺を徘徊している状況に遭遇した。そのときの幼虫の数は何と100頭をしのぐ大群で、筆者は路頭に迷うこれら幼虫の全てを家に持ち帰り、野外のあちこちへと自転車を乗り回して野草スマレを調達して、すべてをチョウにまで育て上げて最後には一部の異常例を除いて家のバルコニーから次々と放してやった。その際、近所の子供たちが思いもかけない大量のチョウの飛翔に気づかないはずはなく、

本来は魚を捕る網をもって追い回す光景も見られた。チョウにとっては迷惑な話だが、筆者が助けなかったなら多くが餓死していたとも考えられ、飼育後はただ自然のなりゆきに任せた次第。それにしても同一種100頭ほどを飼育羽化させたことは波照間島産のメスアカムラサキから採卵飼育して以来



July 28, 2006 松波町飼育羽化♀



July 30, 2006 松波町飼育羽化♀

のこと。さすがにこれだけの数になると図のような通常とは異なる黒化または白化した斑紋変異などの異常タイプ（右側のアンテナは折れたのではなく発育不全）も発生し、それらは記録標本として残している。

なお、このチョウは通常食草のスマレから離れた場所で蛹となるが、その蛹は5対の紋が神秘的な金色の輝きを放ち、このような金色はルリタテハの蛹にもみられ、一体、食草のいかなる成分が金色紋に関与するのか興味があるものの、いぜんとして理由は不明のまま。



Oct. 7, 2009

June 26, 2015 豊岡市来日岳山頂部で

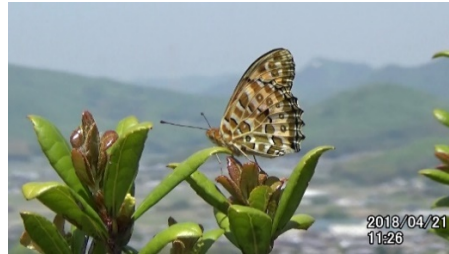
草むらで交尾していたのに気づかず驚かせて、場所を変えたツマグロヒョウモンのペアを撮影



記録できたが、チョウの交尾個体は狙って観察できるものではなく、常に偶然の発見でしかない貴重な記録だ。

Apr. 21, 2018 チョウが舞う黒岩山へ

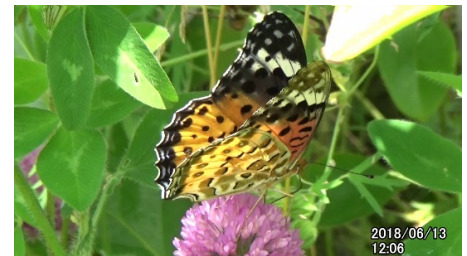
平坦な尾根道を進めば、アゲハ、キアゲハ、アオスジアゲハ、ツマグロヒョウモンが忙しい絡み合い飛翔をみせる。樹液にサトキマダラヒカゲとルリタテハが集まるウバメガシのある場所から北西側の市街を見下ろせるところにはきれいな裏面の銀紋を光らせながらツマグロヒョウモ



ンの♂がテリ張りをしている。

June 13, 2018 平荘町の休耕田花畑

ウラギンスジヒョウモンの♂が♀を探して柿の木の陰部分へと潜り込んだりするので追いかけてみるが姿を見失う。そこへピンチヒッターとして登場したツマグロヒョウモンの美麗♀がアカツメクサの花蜜を楽しむ光景を記録して本日の自然観察を終了。



Sep. 6-7, 2023 ツマグロヒョウモンが蛹化

バルコニーに静置している鉢にはノジスミレが自然に繁殖しており、バルコニーの床面を徘徊していたツマグロヒョウモンの幼虫をスミレに乗せてやっておいたのだが、6日に鉢のへりに下垂する前蛹が目に入る。いつ前蛹となったのか気づけなかったが、夕刻にはもう蛹化していた。小雨がぱらついてきたところでその撮影記録をとってみたが、よくみる金色の紋の輝きが見られ



ない。雨露がついているせいでないことは明らかで、1日経過した7日の朝に確認するとみごとに金色の輝きが見られる。どうやらこの輝きが見られるまでには蛹化してからいくらか時間の経過が必要らしい。次の機会があれば、輝きが見られるまでにどのような経過をたどるのか、観察してみたい。

Sep. 12, 2023 金色の輝きまで約1時間半

ヤマトシジミの羽化記録をとり始めた時点で、ノジスミレの葉柄に下垂するツマグロヒョウモンの前蛹がみつきり、8時半にすでに蛹化した個体が近くにみえる状況も取り込んでその記録をとり、この個体の蛹化脱皮時に金色紋がどれだけの時間経過で発色するのかが観察できると期待。昨日の夕刻には前蛹化していなく、蛹化脱皮は明日以降だと推測したが、洗濯物を取り込んでいる12



時過ぎ、バルコニーの足元に幼虫の脱皮殻が落ちているのに気づく。まさかと確認するとまさしく朝に見た前蛹が脱皮蛹化したばかり。時刻は12時15分頃。急ぎビデオ撮影準備を整え、金色紋の輝きが見られるまで連続撮影状態にして様子を見る。せいぜい30分もすれば金色の輝きが出るだろうと思っていたのだが、想像以上に時間がかかる。結局、1時間20分経過したころに艶が出て、それから10分ほどたってようやく金色の輝きが見られるようになる。まさかこんなに時間を要するとは想定外だが、紋を形成するキチン質かなにかがいくらか固まって初めて太陽光を反射して金色に輝き始めるものと考えられる。